

「ビッグデータ」としての『歴代宝案』

－『歴代宝案』と古琉球史－



生田 滋（大東文化大学名誉教授）

歴代宝案編集委員第3期～現在

はじめに

『歴代宝案』は1424年から1867年にかけて琉球と中国の明朝、清朝、あるいは東南アジアや朝鮮との間で発出・収受された公文書の集成です。この資料には、進貢船の派遣に際して作成された関係文書が収発ともに収録されていますが、その中には船の数、あるいは使節等の姓名、他に進貢物のリストや、国王の貿易商品のリストに至るまで記録されている点において、資料的価値が非常に高いものと言えます。報告者は、これらの『歴代宝案』に収録された詳細なデータを、300年近いスパンで海洋王国としての琉球のいとなみを検証するビッグデータとして利用することが出来るのではないかと考えています。今回は「ビッグデータ」としての『歴代宝案』と題して、3つのテーマをとりあげて報告したいと思います。

『歴代宝案』から見る進貢の様相

一つめのテーマとして、『歴代宝案』から見る進貢の様相、特に物量及び頻度について見てみたいと思います。報告者は、上記の考えのもと、古琉球時代に中国へ派遣された進貢船の頻度、隻数、進貢物の数量に関する『歴代宝案』のデータから、実際の中国への進貢の状況について、分析をおこないました。

付表 1

		進貢船		馬		硫黄		
時期区分		進貢の形態	隻数	前期比	頭数	前期比	数量	前期比
前期	第 1 期 (1372-1382)	1 年 1 ~ 2 貢	—	—	—	—	—	—
	第 2 期 (1383-1439)	1 年 1 / 2 貢	3.5	—	61.9	—	38,013	—
中期	第 3 期 (1440-1477)	1 年 1 貢	1.85	51	25.2	41	35,300	980
	第 4 期 (1478-1506)	2 年 1 貢	1.6	89	21.3	85	28,345	80
	第 5 期 (1507-1517)	1 年 1 貢	1.3	81	18.2	85	27,272	90
後期	第 6 期 (1518-1548)	2 年 1 貢	0.7	51	5.4	30	8,818	32
	第 7 期 (1549-1609)	2 年 1 貢	0.9	128	2.8	52	6,192	70

注

- * 進貢船は琉球国中山王名義のものに限ってある。
- * 年平均の数字は進貢船の派遣された年だけに基づいて算出してある。
- * 出典：生田滋「対外関係からみた琉球古代史・南島稲作史の理解のために」（渡部忠世・生田滋共編『南島の稲作文化・与那国島を中心に』法政大学出版局、1984）93-126 頁。

この分析にもとづく、古琉球時代は、前期・中期・後期そして第 1 から第 7 期まで区分できます（付表 1）。前期・第 1 期に、琉球国中山王が史料の上に登場する背景には、明の海禁政策・鎖国政策があります。琉球の中国との貿易は、最初は泉州、後に福州でおこなわれていましたが、これは福州の貿易商人の代理貿易であると考えられます。付表 1 には国王が派遣する進貢船の 1 年間の派遣回数を記載しています。最初のうちは 1 年に 2 回、3 回と派遣がおこなわれていますが、やがて制限されて 1 年に 2 回になり、1 年に 1 回となります。また、派遣回数の減少に対して、1 回の進貢物の数量に変化があるわけではありません。さらに硫黄や馬などの進貢物の年間の平均数も次第に減少しています。つまり、琉球から明に進貢の際に送られる品物の数は次第に減少し、規模が段々小さくなっていくということが分かります。規模の縮小に伴い、初期にはこれを補うため密貿易が行われたと想定されますが、これも長期的に持続することはなかったと考えられます。この時期は、久米村の中国人集落も非常に影が薄くなっていきます。

またそのころ、琉球王国では尚真王（在位 1477—1526）の時代でしたが、政治の実権は尚真王の母親であるオギヤカが掌握していました。このオギヤカ・尚真王の政

策に着目すると、聞得大君を頂点とした神女組織の形成、ヒキ制度の完成、あるいは辞令書の発給をもとにした官人統治によって国内支配の強化が図られた時期、ということができます。しかし、これらの政策を中国への進貢物、進貢船の状況と重ねあわせて考えると、14世紀後半の琉球王国の成立直後は、土地の支配、人民の支配というよりは、むしろ貿易の支配に基づいてその権力を維持していたと指摘できるかと思えます。そのため権力の源泉である進貢船の派遣回数に減少に伴って、やむを得ず中央集権的な支配体制に移行していく様子がこの数字から窺えるのではないかと思います。中興の祖と称される尚真王によるさまざまな政策の実施は、実際には権力の維持とその固定化に必要な不可欠な政治的判断であったと私は推定しています。

東南アジアとの交易

第二に東南アジア諸国に派遣された琉球からの貿易船の年ごとの隻数に注目してみたいと思います（付表2）。

付表2 東南アジア派遣琉球船隻状況

	暹 羅	旧 港	爪 哇	満刺加	蘇門答刺	太 泥	安 南	巡 達
1425	2							
1426	1							
1427	2							
1428	1	1						
1429	2							
1430		1	1					
1431	1							
1432	2							
1433	3							
1434	2							
1435	1							
1436	1							
1437	2							
1438	2	1	1					
1439	1							
1440		1	1					
1441			2					
1442	1		1					
	*****	史料欠如	*****	*****	*****	*****	*****	*****
1463				1	1			
1464	1(1)			1				

	暹羅	旧港	爪哇	滿刺加	蘇門答刺	太泥	安南	巡達
1465	1			1				
1466				1				
1467				1	1			
1468				1	1			
1469	1			1				
1470				1				
1471				(2)				
1472	(1)			2				
1475				1				
1478	1							
1479	(1)			1				
1480	1			1				
1481	2							
1490						1		
1492				1				
1498				1				
1503				(1)				
1509	2			1			1	
1510				1				
1511				1				
1512	1							
1513	1							1
1514	1							
1515	1					1		
1516						1		
1517	1							
1518	2							1
1519						1		
1520	1					1		
1521	1							
1522	(1)							
1526	1					1		
1529	1					1		
1530						1		
1533	1							
1536	1					1		
1537	1							
1538	1							
1540	1							
1541	1							
1543						1		
1550	1							
1554	1							
1564	1							
1570	1							

まず付表2の暹羅（当時はアユタヤ王国）、マラッカ王国、パタニ（太泥）、この3つに着目します。『歴代宝案』に収録されるより以前の時期にあたる14世紀の初め頃、つまり琉球王国成立以前の東南アジアにおける貿易の状況を知る史料としては、第一に『元史』、次に1270年代にこの地域を通過したマルコ・ポーロの『東方見聞録』が挙げられます。



図1 琉球王国交易概念図

図1「琉球王国交易概念図」で当時の位置関係を確認していただきたいと思います。アユタヤは現在のバンコクの北に位置しており、パタニはマレー半島の西海岸に位置していました。「琉球王国交易概念図」では陸路を越えてパタニに行くように書いてありますが、マレー半島の突端を回り海路を通った可能性もあり、当時の詳細な経路については判然としていません。また、スマトラの北に位置していたサムドラ・パサイ、パレンバンなどが、付表2中の「旧港」に該当します。これらの地域は、14世紀の初め頃、非常に重要な貿易の中心地でした。これらの地が貿易の中心地になり得た理由は、西方から来る貿易船と、中国を出発し南方へ向かう貿易船が出会う中間地点であり、双方を繋ぐ中継貿易をおこなう場所であったからだと考えられます。現在のジャワ島に位置していたマジャパヒト王国にも琉球船は交易を行っていました。マルコ・ポーロの記述によると、これらの地域へ向かう中国からの古いルートは、現在のインドシナ半島の南、南ヴェトナムの付近からマレー半島を直交し、ジャワに向かいます。その後マラッカ海峡を通り、サムドラ・パサイに立ち寄り、そして西の方へ出るというものでした。

ところが、明の海禁政策により、中国船の海外渡航は禁止されました。その結果、この貿易ルートに大きな変化が起こり、アユタヤ王国が東南アジアの中で際だって重要な貿易港となりました。その理由としては、アユタヤ王国の後背地であるシャムが米の産地であり、当時米は輸出商品として周辺地域に対して重要なものであったからです。つまり、琉球の貿易船も最初、古い時代のジャワ、スマトラの貿易港を訪れていたところ、周辺の状況が変わるとアユタヤに寄港するようになったと推測できます。

また、恐らくパタニというのは、明の海禁政策以前にスマトラにあった貿易港の名残であり、周辺の状況が変化した後、西方から訪れる貿易船との中継貿易の中心港となったと考えられます。さらに1450年頃になると、マレー半島の南にマラッカという国が勃興し、ここに貿易の中心地が移っていきます。付表2から、短い期間ではありますがマラッカに貿易船が多数訪れていることが分かります。

付表2からは、この期間、進貢船の派遣の記録の2ヶ所に欠如が見られます。『歴代宝案』には毎年の進貢船派遣記録が収録されているはずですが、この記録の欠如は、マラッカへの寄港と深い関係があると私は推測していますが、このように琉球からの貿易船も東南アジアにおける海上貿易の中心地へ航海していたということが分かります。1511年にマラッカがポルトガル人によって占領されると、琉球人はマラッカへ

行くことをやめ、再びアユタヤへと寄港地を変更しました。これは東南アジアにおける貿易の中心地がマラッカとアユタヤの2つに分かれていったことを指しています。

東南アジア交易の終焉

第三の点は、タイ、アユタヤに対する中山王国からの貿易船の派遣が 1570 年で終了するという問題です。派遣の終了は、東南アジアの海上貿易、特に明の海禁政策との関係で非常に大きな変化が起きていたことを反映したものです。

まず、1537 年に福建の商人によって現在の浙江省寧波の近くに双嶼という密貿易の基地が作られました。これは長く存続することはなく、明の官兵によって破壊されましたが、先述した『歴代宝案』の文書が欠けている 2 つの時期のうちの 1 つと、双嶼が機能した時期が一致しています。これには、久米村の中国人集落と双嶼の建設との間になんらかの関係があると推測できます。1550 年頃になるとポルトガル船の来航によりマカオと長崎、日本の間で銀の貿易が開始されました。これとほぼ同じ頃にメキシコ産銀で鑄造されたスペインの銀貨が大西洋を横断し、ゴアを経由した後に中国へ流れ込むようになります。

さらに 1570 年になるとさらに大きな変化が起こりました。マニラをスペインが占領してここを貿易港として開港しました。すると、メキシコからマニラを経由し銀が中国に流れ込むようになったわけです。このように、当時の世界の貿易の情勢に非常に大きな変化が起こっていました。これは質的な拡大ではなく、日本からの金・銀の輸出、メキシコからの銀の輸出が非常に増加したことによる、いわば量的な拡大でした。この状況の中で、琉球だけが 1570 年のタイへの派遣を境に東南アジアとの貿易から手を引いていくことになります。

その最大の理由は、言うまでもなく、明で海禁令が 1568 年に解除され、中国船が東南アジアの各地に進出するようになったことに起因しています。これによって、中国と東南アジア間の中間貿易地としての琉球は、その役割を終えたと言うことができるのではないかと思います。このタイミングにおいて、琉球は例えば日本の金銀、あるいは中国の生糸・絹織物・陶磁器、あるいはメキシコの銀などといったような、いわば現在の言葉で言うところの「国際競争力」のある商品という物を持ちえなくなったわけです。これが、交易勢力図からの琉球の撤退を決定づけることとなりました。

古琉球時代の国王の輸出商品の中で一番重要な物は硫黄と馬でした。硫黄は日本や中国・インドでも採取され、それほど重要な意味を持った商品という訳ではありませんでした。琉球産の商品という意味で「国際競争力」の可能性を有していたものは塩でした。しかし、当時の中国では塩は専売制が採られていたため、正式な交易品となり得るものではありませんでした。あるいは史料が発見されていないだけで莫大な量の塩が琉球から中国へ輸出されていた可能性も皆無とは言えませんが、これは想像の域を出ないものです。

また、例えばバリ島の例などを見ると、国際競争力のある商品が輸出されない場合は、奴隷と米を輸出商品としていることが確認できますが、琉球の場合、そのような事実が史料上確認できないことから、おそらく琉球においては、奴隷を商品として輸出するだけの余剰人口もなく、米の生産も十分ではなかったのではないかと推測できます。報告者はむしろ逆に米は中国から輸入していたのではないかと考えています。結果として琉球はその後、福州と鹿児島間の貿易の中継地となり、やがて薩摩の支配下に入っていくことになっていきました。

最後になりますが、東南アジアに関する『歴代宝案』の記事も、同様にデータ化し検討することで東南アジアとの貿易の実態について、さらに明らかになることがあるのではないかと、ということをご期待して本報告を終わりたいと思います。